

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第16回 第5.4.4節～第5.5.1節

2018年8月15日

小田 勝

142頁「5.4.4 局面動詞」。用例(1)～(6)の類例をあげる。

- ・常夏のはなやかに咲き出でたるを（源・紅葉賀）
- ・山深み寂しき宿の主とはなりおほせたる身にもあるかな（拾玉集）

用例(4)について、古典文では、現代語にはない、「風吹き止まる」（風雅 487）、「庭の虫は鳴き止まりぬる雨の夜の」（風雅 564）のような表現もある。また、「～を＋自動詞」（§2.4.3）型の「笛を吹きやみて、立ち返りて「こは何者ぞ」と問ふに」（宇治 2-10）のような表現もある。

動作の完成の局面を表す補助動詞には、「-あぐ」「-敢ふ」「-果す」「-きる」「-すます」「-とほす」などがある。「やる」は打消の語を伴って、「最後まで…しきらない」の意を表す。

- ・言ひもやらず、むせかへり給ふほどに（源・桐壺）
- ・春来ても積もりし雪は消えやらでむらむらあをし野辺の若草（新続古今 64）

同頁2つ目の◆に示したように、現代語の「…てしまう」に相当する表現として、近世以前に「…てのく」があり、さらに遡ると「…てすつ」という表現があった。

- ・「その儀ならば、ただ一矢に射殺してすてよ」とて、例の先細〔ノ矢〕をうち番へて（保元・金刀比羅本）
- ・にくい振る舞ひかな。我らがうち負けば平家にくみせんと、時宜をはかるとおぼゆるぞ。いざ蹴散らしてすてん。（平治・古活字本）

「…てしまう」の意の「(…て) のく」には、下二段（近世には下一段「…てのける」）も四段もある。『日本国語大辞典〔第2版〕』では、四段の方（「のく（退）」の項□-二）の最初の挙例に、「中華若木抄（1520 頃）下「…塵となりてのくる也」という下二段の例が誤ってあげられている。なお、1283年の『文机談』（『文机談全注釈』274頁）に、「さて孝時は楽みな弾き終はりて後、孝道申されけるは、「……」と言ひて、渋る渋る灌頂の日を定めてのきにけり。」という例があるのであげておく（この「のく」は「去る」の意の本動詞かもしれないが）。次のような「…をはる」も、「…てしまう」の意だろう。

- ・命量なしと言へど必ず終はりをはる（四条宮主殿集・詞書）

・「追ひ払ひ候へば、逃げをはりぬ」とこそ申しけれ。(宇治 1-9)

同 142 頁「5.4.5 局面を表す名詞」。用例(1)～(3)の類例をあげる。

・武蔵野の小川の原の秋萩も花咲きがた(=花ガ咲クコロ)になりにはらしも(好忠集)

・それを題にて詠む。詠み果てがた(=詠ミ終ワルコロ)に(伊勢 101)

接尾辞「-すがら」は、名詞について、「…の間じゅうずっと」の意を表す名詞を作る。

・帝、月の宴し給ひて、夜すがら遊び明かし給ふ。(松浦宮物語)

・さ夜すがら置く露霜を払ひつつ誰ゆゑむすぶ草の枕ぞ(大斎院御集)

「5.4.7 結果の含意」では、144 頁用例(14)の類例をあげておく。

・世中を 思へばくるし 忘るれば えも忘れず(能宣集)

「5.5.1 「き」「けり」の活用と接続」。145 頁の用例(3)は、「き」の古い未然形「け」の例。後世 1 語にみえる過去推量の助動詞「けむ」は、恐らくこの「け」に「む」が付いたもの(「け-む」)であろう(だから、日本語史でよく示される「総合的表現(ケム)から分析的表現(ターダロウ)へ」という定行変化(drift)は、一考を要すると思う(小田勝 2015:6))。

146 頁最初の◆の例を追加する。

・いささか御心地よろしくおはしませしかば(保元・古活字本)

・かの人の示せし人かとて、その書を与へたり。(続古事談)

146 頁 2 番目の◆の②に述べたように、「き-し」は中古に「来し方」という形に限って現れるから(「こ-し」と異なり、「*来し道」「*来し時」のように他の名詞に続くことはない)、「来し方」は、これで 1 つの名詞と認定すべきものである(そうすれば、過去の助動詞「き」の連体形「し」、已然形「しか」は、カ変に対して未然形接続である、ということになる)。147 頁③の 2 例は、違例と考えたい。なお、

・住吉のきしもせざらんものゆゑにねたくや人にまつと言はれむ(拾遺 587)

について、新大系の脚注に「「岸」に「来し」を掛ける。」とあるが、この「し」はもちろん副助詞であって(「来もせざらん」の間に「し」が入ったものである)、当然そのつむりの説明ではあろうが、誤解されやすそうである。⑤ではク語法形に触れたが、「来」「す」が、反実仮想を表す「き」の未然形「せ」(「せば…まし」の「せ」)にどのように接続するか(「コせば」か「キせば」か、「セせば」か「シせば」か)は不明である。

なお、前回(連載第 15 回)の 1 頁目(通算 35 頁)の下から 11 行目の用例の「武隈のの」は「武隈の」の誤記であった。お詫びして訂正する。

[出典追加] 松浦宮物語①一説に藤原定家とも②12 世紀後半③新全集 40

[引用文献追加] 小田勝 2015 「古代語の品詞はどう捉えられるか」『日本語文法』15-2